

博 士 学 位 論 文

— 論文要旨および審査結果の要旨 —

第 11 号

武蔵野音楽大学

— は し が き —

本編は学位規則 (昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 8 条の規定による公表を目的として、平成 28 年度に本学において博士 (音楽学) の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第 19 号	博士 (音楽学)	赤 木 詩 子	H. ヴォルフの《ゲーテ詩集》研究 — 詩と音楽の配列の意味 —	1
博甲第 20 号	博士 (音楽学)	栢 菅 有 香	細川俊夫の創作、活動と批評 — 日本とドイツからの考察 —	4

氏 名	か や す が ゆ か 栢 菅 有 香
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博甲第 20 号
学位授与日	平成 29 年 5 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	細川俊夫の創作、活動と批評 — 日本とドイツからの考察 —
論文審査委員	主査 教 授 寺 本 まり子 副査 教 授 薦 田 治 子 副査 講 師 稲 田 隆 之 副査 講 師 石 川 亮 子 副査 白 石 美 雪 (武蔵野美術大学教授)

論 文 要 旨

本研究は、日本人作曲家細川俊夫 (1955-) が、日本のみならずドイツにおいて、いかにして「世界のホソカワ」として認められるに至ったのか、日本とドイツにおける創作と活動、そしてそれらをめぐる批評の 3 つの観点から包括的に明らかにすることを目的としたものである。

序章では、細川研究がまだほとんどなされていないこと、また 10 点の作品カタログの内容を検討した結果、細川の未完の作品を含んだものではなく、学問的な検証を経てまとめたものがないことが確認された。したがって、本研究は細川の作品カタログを作成する所から始めた。

第 1 章では、細川の創作を初期—1980 年代前半：音と沈黙、線、1980 年代後半—1990 年代前半：母胎、母胎空間、母胎音響、母胎和音、1990 年代後半：梵鐘、梵鐘様式、2000 年代—現在：総合的回帰、あるいは「陰」と「陽」の 4 期に区分した。この区分は、第 2 章以降の枠組みとなっている。

第 2 章では、前章の各区分におけるキーワードないし細川が言及している書法を、細川と第三者による言説面と作品面から検証した。第 1 節の言説面では、「線」は細川の関心事である「音と沈黙」のメタファーであると考えた。作品面として《夜の呼び声》では、呼吸音や氣息音などの現代奏法を徹底的に使用することで、沈黙から音が立ち現れる様子を丹念に描き、《線 I》では現代奏法とデュナーミクを駆使することで「線」を表現していた。第 2 節の言説面では、母胎から母胎和音までの変遷を確認した。その結果、「母胎」とは物事を生

み出す基盤、「母胎空間」とは細川においては「濃密な意味をもつ場所(トポス)としての耳に聴こえない空間」、「母胎音響」とは流動する音響、「母胎和音」とは c-fis-g-des 音から成る和音であった。作品面では《遠景Ⅰ》を通じて、「母胎音響」には 2 度、7 度、増 4 度、減 5 度が多用されていること、《旅人》を通じて「母胎和音」には 2 種類あり、細川が述べる c-fis-g-des 音だけではなく、e-a-b-es 音が見られることが確認できた。第 3 節の言説面で考察した「梵鐘様式」とは、梵鐘の響きの生成過程を表現するものであり、作品面では《遠景Ⅱ》を通じて、各声部に記されている音型を反復させることで、複雑な響きを生み出す書法が見られたのに加えて、母胎和音の使用も認められた。第 4 節の言説面では、細川がこの時期に新しく用いた言葉として (1) 海、旅、花、(2) 鼓動、(3) 舞、儀式、シャーマン、再び用いた言葉として (4) カリグラフィー、(5) 母胎和音を考察した結果、これらを貫く思想として「陰」と「陽」が存在していることを導き出した。作品面では《月夜の蓮》と《松風》を通じて、「陰」と「陽」を表現する際に「母胎和音」の構成音の中から 5 度を抜き出して使用する傾向にあることを指摘した。

第 3 章では、細川が音楽監督を務める秋吉台国際 20 世紀音楽セミナー&フェスティバルと武生国際音楽祭の活動を通じて、海外の潮流を日本に紹介しつつ、日本のすぐれた作曲家たちを海外に輩出しながら、今日まで日本の作曲界を牽引してきたことを示唆した。

第 4 章の第 1 節では、国別に委嘱作品をまとめ、日本とドイツ語圏が圧倒的に多いことを示した。第 2 節ではベルリン芸術アカデミー、ベルリン高等研究所、バイエルン芸術アカデミーで細川が会員やフェローとして行った活動や各機関の概要を把握し、とりわけベルリン高等研究所では、創作に没頭できる環境が用意され、さまざまなフェローとの出会いが数多くの作品へと結実したことを確認した。

第 5 章では、日本で発行部数の多い朝日、毎日、読売新聞、『週刊オンステージ新聞』、音楽雑誌における細川の活動の初期—2015 年の記事を対象に、細川の創作活動がいかに論じられているのかを分析した。その結果、1979 年に初めて細川の名前が掲載された後、1997 年には「ポスト武満徹」、さらに 2005 年には「世界のホソカワ」と言われるまでに細川の作曲家としての名声が確立されていたことがわかった。

第 6 章では、ドイツ語圏の 8 社の新聞における細川の活動の初期—2015 年の記事を対象に、細川の創作活動がいかに論じられているのかを明らかにすることを目的とした。その結果、日本と同様の 1997 年に、細川を武満の後継者と見なす記事が掲載されていた。

したがって、細川に対する評価は、日本とドイツにおいて 1997 年に定まったことが明らかになった。

本研究では、創作、活動、それに対する批評の 3 つの角度から、包括的に検証した結果、ドイツの前衛音楽の語法を吸収した細川が、自ら確立した「母胎和音」という語法で日本の美学をコンセプトに持つ作品を創作し、数多くの委嘱作品を手がけながら、若手作曲家を育成するという細川の姿勢が、「ポスト武満徹」としての細川像を「世界のホソカワ」へと押し上げたという結論に至った。

論文審査結果の要旨

執筆者は、修士論文から細川俊夫の作品を研究対象としており、博士論文はこの現在活動中の作曲家が如何にして「ポスト武満」を越える「世界のホソカワ」としての地位を獲得していったのか、日本とドイツにおける創作と活動、そしてそれらをめぐる批評という3つの角度から包括的に検証したものである。

細川自身及び同時代の評者の言説からキーワードを引き出した上で、各時期の代表的な作品における手法を分析しているが、メタファーを好む細川の音楽思想から考えて、これは一つの側面を詳らかにする有効な方法と言える。また、創作を扱った第2章では、キーワードの「母体和音」を具体的な作品分析から導き出し、その構成音の変化を指摘したこと、2000年以降の時期を「陰」と「陽」の時代として特徴づけて概観したことが主要な成果と言えよう。細川のプロデュース活動やアカデミーでの活動を視野に入れたことも、興味深い着眼点である。第5－6章の新聞における批評については、日本とドイツの両方の代表紙を扱ったことが高く評価できる。

しかし、各資料の扱い方については、やや素朴すぎる点が散見された。例えば、作曲家が初演のために書くプログラム解説、評論家を書いた世界初演の批評といった質の異なる資料を同列に並べて論じるには、予めそのことについての議論が必要であろう。また作曲者や第三者の言説、特にドイツにおける批評を読み解く際に、ともすると表面的になってしまい、あと一步踏み込んだ考察には至っていない点が惜しまれる。細川に対する評価を論じた章では白石氏の方法論を踏襲しているが、三大新聞を対象としたことについては、その論拠が示されるべきである。

本研究は音楽家としての細川俊夫の初期から今日に至る活動を多面的にとらえている点、そしてそのために必要な文字情報を膨大に調査・収集している点に、先行研究にはなかった独創性がある。同時代の現存の作曲家を扱う難しさは、本人との距離の取り方にもあるが、本論文はあくまで、すでに活字となった客観的資料を手掛かりとしていることで明確な線引きがなされている。徹底して作曲者と距離を保ちながら、公正かつ客観的に創作、活動、そしてそれらをめぐる批評について取り組み、学問的手順を踏んだ論文に仕上げられた本論文は、課程博士としての称号を授与するに値する水準には十分達していると判断できる。

博士學位論文 論文要旨および審査結果の要旨 (第 11 号)

平成 29 年 8 月 5 日発行

発 行 武蔵野音楽大学大学院

編 集 武蔵野音楽大学学務部

〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1

電話 03-3992-1128
